

職業とことば

著者	金井 秀一
出版者	長野県ことばの会
引用	ことばの研究 2: 9-16 (1983)
発行年月日	1983-04-17
URL	http://hdl.handle.net/10091/00022353

職業とことば

職業によって、それに従事する人々のことばづかいに、かなりの差異、もしくは特徴があるようです。このことは以前からよく然と興味を持っていたのですが、ラジオ番組でこのテーマを取り上げ、少し調べてみようということになり「職業とことばシリーズ」を組んで取材することになりました。

放送では一日中ことばが流れています。

その送り手の一人として日常、ことばには深い関心を抱いているのですが、なにぶんにも、学問的に接している訳ではないので、どういうアプローチをつけ、どんなサンプルで職業によることばづかいの差異を特徴づけるかについては、いささか腐心しました。

そこで混乱をさけるために、職業のタイプを肉体労働型と精神労働型の二つに大別することにし精神労働型の中には事務職以外の対面販売従事者も含めることにしました。

従って、ここでの精神労働型は、いわゆるホワイトカラー、事務系職種を中心としたサラリーマン、公務員、サービス業種の対面販売従事者まで、その範囲はかなり広がります。更に「職業のことば」に組み入れるには多少の疑問はあったのですが、最近の学生のことばづかいの中に、かなりの特徴が見られるので一つの集団こ

とばとして取り上げてみることにしました。

このような分類のよしあしは別として、一過性のラジオ放送であることを考えて、「一回聞いただけで理解できる」わかり易さを大前提に置きながら取材に入りました。

金 井 秀 一

精神労働型の職業とことば

精神労働タイプの例としてまず選んだのは銀行の行員です。以下は男子行員との電話応待録音会話の採録です。

「それで改印届けという用紙があるんですが」「ええ」「それでお名前を書く欄があるんですが、お名前を書く所へは前の実印をおしていただきたいんです」

「はあはあ」「それで真中あたりに四角に囲んだ欄がありますので、そこへは今度は普通いう認め印ですね」「ええ」

「それをおしていただいて、それから新しくするアノー印鑑表なんです、そこへは今度お使いになるハンコをおしていただければ、それで結構なはずです」

きちんと折目正しく応待しながらも、やはり道のプロとしての自信が、ことばの裏に感じとれるような応待ぶりです。

次にデパートの男性社員の場合です。外商部の事務職員ですが、大口の顧客などの窓口のためデパート内では特に応待に気を使っている職場です。銀行の場合と比較しながら、録音採録を並べてみましょう。

「ちょっと、午後、出掛けてまだ戻っておりませんが、そう致しますと明日（みょうにち）は休みになってしまうんですが、」「「ちょっと電話連絡を」「そうでございますか、かしこまりました」「お願いします」「ハイ、どうもありがとうございます」「た」

このように銀行とデパートを比較してみると、デパートの方は実にいいねいなことばで応待し、顧客最優先というサービス精神がよく感じとれる応待ぶりがわかります。

一方、銀行は、これも折目正しく応待しながらも預金だけでなく、融資や経営コンサルタント的な業務も含まれるためでしょう。指導性やプライドも併せ持っている感じが、その応待から伺うことができます。

そういった違いが、この二つの録音採録に表われているように思えます。

ただ、両者とも共通なのは、銀行もデパートも接客マナーや応待用語などについては、かなりの訓練や研修を積んでいる点で、この二例はいずれも入社後に身につけた「ことばづかい」のように思えます。

肉体労働型の職業とことば

銀行、デパートなどが精神労働型の職業ことばに属するとすれば、営業車の運転を業務とするプロ運転者は肉体労働型言語タイプに属すると言えましょう。職種、業務内容によっては、精神、肉体両面を必要とする場合もあるでしょうが、車の運転は車種の大・小にかかわらず、かなりの肉体疲労を伴なうでしょうから一応、肉体労働言語パターンにいられて考えることにしました。つぎに示す録音採録はSBCラジオの「ほろ酔い電話リクエスト」の番組の中で司会者とリクエスターであるプロ運転者との会話です。まず一人目はタクシートの運転手さんとの話です。

「あのう、タクシートの運転手やってんですよ。ワタシの年代になると、親子の断絶とか、今いろんな事いってるけどね、親子の断絶ってことはね、ワタシは非常にその悲しく思うんですよ」「ナルホド戦争経験はおありですか」「ええ、少しあるんです」「そうすると四十五歳以上ですか」「以上です。だけど内地にい

たもんでね」「内地にいて終戦をむかえたと、こういう訳です
ね」「そうそう」

あまりいいねいではありませんが話し方に実感がこもっていて、
全体としては感情豊かな会話の流れを感じとれます。

同じ業種でもトラックの運転者の場合はどうでしょうか。前と同
じ「ほろ酔い電話リクエスト」中の会話で、飯田市のトラック運
転者との録音採録です。

司会「一歳五ヶ月でビール、コップに一杯飲んじゃうんです
か」「ガバガバね」「大丈夫かなあ」「うん、もうビールで育っ
た子がおるって位で大丈夫じゃないの」「ハア、で赤くなっ
ちゃう」「いや、ちよっと、あんまりやるとね、ちよっとヨタヨタ
するけどね、ハハハハ」「そりやそうでしょうよ、ヨタヨタする
ほど飲ましちやだめだそりや」「そうするとオヤジの方も青くな
ってヨタヨタしちゃうよ」「ハハハハそりや驚いたなあ大丈夫で
すかなあ、そんなに飲ませて」「いやあ、今もねえオヤジのコッ
プから盗んで飲もうとしてる。ハハハハ困ったもんだね、金井さ
んに似て、ハハハハ」

晩酌中で気分が打ちとけていることを割り引いても、精神労働型
の言語タイプより、この二人の肉体労働型の運転者の方が、話しの
運びも面白いし、会話にもユーモアと躍動感があります。会話を躍

動させるにはセンテンスを短かくし、相手との間に短い会話がさ
ながらピンポン玉のように行き交うようにすると効果があるのです
が、タクシーやダンパー、定期便トラックの運転手さん達にイン
タビューすると、この原則に符合するような話し方をする人が多い
のです。例えば、「お仕事は?」「でけえの、でけえの」(大きい
の意)「でけえの、というと?」「ころがしてんだ、ころがしてん
だ」「ああトラックですか」「そうそう、定期、定期」という具合
にセンテンスがとても短かいのです。それに比較して、ホワイトカ
ラーやサービス業種の人々の場合は、天気の挨拶から始まり、会話
のそれぞれのフレーズが長くなるという特徴があります。厳密にい
えば話し方は一人一人のクセや個性によって個別に出来あがる部分
もありますから断定は出来ませんが、あくまで一般論としての差異
があるように思われます。運転者に較べて、サービス業種の人々の
会話フレーズが長いという傾向のひとつの理由は応待やセールスの
ための訓練を受けていること。常に職業を意識して、いわゆるビジ
ネスとしての会話の習慣がかなり身についているという特徴があ
げられます。

同じビジネス用の言語でもタクシーやトラックなどの運輸業の場
合は時間を刻んで人や荷物を運搬する「時間が勝負」でもある訳で
すから業務用の会話も当然「明瞭で、かつ能率的」であることが要
求されます。この業種の人々の言語のセンテンスが総じて短かいの
は、必要が生んだものとも考えられます。

例えば長野市でタクシーに乗り「善光寺まで」と行き先を告げると運転手さんは配車係に「〇〇号車、寺」（テラ）と無線連絡をします。長野市内にお寺は多数ありますが、このタクシー会社の場合「テラ」と言えば、それは善光寺を指す了解が成立しているのです。

まさに「明瞭で能率的」です。

これが日常会話にも持ち込まれ、単語がポンポンとび出すような話し方が習慣化しているものと思われれます。

それは又、体を張って危険と背中合わせの仕事をしている人々の飾り気のない人柄が言語を通じて伝わってくるようでもあります。

商業従事者の職業ことば

広範囲にわたる商業従事者の中から、ここでは対面販売従事者の職業ことばに焦点をしばって考えてみたいと思います。

昔（昭和中期頃まで）よく物売りの声が街に流れ、今でいう戸別販売をしていました。納豆売り、八百屋、魚屋、飴売りなど、さまざまですが、これらの売り声の調子が商品と深くかかわっていることに気がつきます。

納豆売りの売り声などは少年時代に毎朝聞いていましたのでよくおぼえています。納豆にふさわしく長く糸を引くような一種独特な響きをもっていました。「なっと、なっと——なっと」という売

り声を戸外に聞くと「納豆屋さん」と注文をしなくなるような魅力を持っていました。

これとは逆に天びん棒を肩に鰯を売り歩く魚屋さんの売り声はまことに威勢がよく、魚がまだピチピチ生きているような感じでした。

「エーイ鰯こいッ、エーイ鰯こいッ」と歯切れよく売り歩くと思わず買い気をそそられ魚がよく売れたということであつたようです。

もし、この納豆屋と魚屋の売り声の調子が入れ替り、納豆売りが歯切れよく、鰯売りがねばるようなスローな売り声であつたら、たちまち商品イメージはダウンすることになるでしょう。

この昔の物売りの「売り声」のイメージは現代でも業種や商品を扱う人々の間で生き続けているのではないか。そう考えたのです。

そこで、まず長野市内の貴金属店を訪ね、ダイヤモンド売場で店員にインタビューしました。以下はその採録です。

「このケースの中で一番値段が張るといのは」「そうでございませぬ、こちらにございます298万円、1キャラットちょっとございますね」「ハハア、どういう人が買うんですか」「まあ大体アノ失礼ないいかたですけれども1キャラットあるいは2キャラット、その辺のダイヤの輝きというのがダイヤの中では一番美しいと言われております。まあ正直、申し上げまして、余祐がない方ですとちょっと手が出ないということです、まあそれに応じた所得のある方、まあ、お医者さんとか大体そういう高額所得

者でないと、なかなかむずかしいです、ハイ」

この会話の特徴は、ダイヤモンド売場の対面販売者が客の気持ちや自尊心を傷つけないよう、気を配りながら応待している様子がよくわかります。「失礼ない方ですけれども」などの表現がそれです。ただこの場合、少し気になるのは一歩間違えると「いんぎん無礼」になり客に不快感を与える場合もあるということです。したがってこのような業種の対面販売者は単に言葉の上の「いねい」だけでなく誠実な応待により心を配ることが必要といえましょう。

では、貴金属店とは対照的な対面販売者、寿司屋さんのことばの調子はどうでしょうか。

長野市内の寿司屋さんを訪ねて客の立場でハナシを交わしてみました。以下はその録音採録です。

「こんばんは」「いらつしゃい、どうぞこちらへ」「きょうは何かウマイものある」「ハイ、アワビ、磯のアワビの片想い、うに、えび、かんばち、それと青柳が時期です。シュンですね」「ああ、青柳が今シュン!」「シュン。シュンシュンと燃えております」「じゃあ、それもらおうか」(中略)「アガリお願い」「ハイ静岡正宗三ちょう」「ハイヨ」「どうもごちそうさま、お愛想お願いします」「ハイ有難うございます、五千三百二十万円です。有難うございましたア」

この寿司屋のご主人の話によると「この様な応待の調子は小僧の時代から親方の調子が自然に身についたもので、別に教わったものではない。なまものを扱っているから、威勢よく客とハナシをしろという事は親方からよく言われました」とのことです。

ではここで、職業別にそれぞれふさわしい言語パターンがあり、それが利用者や消費者に当り前のこととして抵抗なく受け入れられていることを前提に、これを逆転してみたらどうなるでしょうか。つまり、「貴金属店のような寿司屋」「寿司屋のような貴金属店」の応待が、もしあるとすれば、どういうことになるかという発想です。そこでアナウンサーに、その両者を再現してもらいました。以下はその採録です。まず、「貴金属店員のような寿司屋が、もしいたら」

「ハイ、何をお握り致しましょうか。こちらの小粒のものがイクラでございます、こちらには、とろ、かんばちなども取り揃えてございます。ウニは一寸お値段が張りますんですが、青柳などは如何でございますでしょうか、今、シュンでございます、シュンシュンと燃えているようでございます」客「そうですか、じゃあ、きょうは帰ります」

次は、「もし寿司屋のような貴金属店があったら」です。

「ヘイ、いらっしやい。こっちは0.2カラットのダイヤモンド。結婚指輪によく出るネ。値段も二、三〇万円。安いもんだ。ハイツ、お次は1カラットのダイヤね。こいつはちょっと稼ぎのいいもんじゃなきゃ、手が出ないよ」客「じゃあ又にするよ」

これでわかることのひとつは貴金属店のような寿司屋も、寿司屋のような貴金属店員も共に客の買い気や喰い気もそらず、むしろその異様な応待に「ダメダこりゃ」と尻尾を巻くだろうということですよ。もうひとつは、貴金属店員の場合は銀行、デパートと同じように、専門家や先輩達から、かなり専門的に応待やことばづかいの訓練を受け、一定期間の特訓によって「職業ことば」が形づくられているのに対し、寿司屋さんの場合は、主人も述べているように、親方について修業しているうちに、いつの間にか威勢のよい、いなせなシャベリ方が身についたのだということです。更に貴金属店では店員が客に駄ジャレなどは決して飛ばしませんが寿司屋さんの方は、客を相手に盛んにジャレをとばしているのが特徴的です。お茶（あがり）のことを「静岡正宗」水（おひや）を「戸隠正宗」と呼んだりしています。静岡は茶の産地ですし、戸隠は長野市への上水道の水源のひとつですからその地名を上手にジャレて、お茶（あがり）や水（おひや）に結びつけています。単なる職業意識にとどまらず、客とのジャレた会話を楽しんでいることが感じ取れます。そして、何よりも、この「庶民的職業ことば」を聞いていると、

画一化、都市化、標準語化が進む日本語の傾向の中で、古い日本語や庶民のことばにふれた思いがします。そして、日本語のよさを再発見するのです。

学生の集団ことば

職業ことばとしては分類しにくいのですが集団語として大きな特徴をもつので、広義における「集団ことば」として取り上げることになりました。いわゆる新造語を生み出す母体はテレビ、ラジオのコミーシャルがその最たるものでしょうが第二位あたりにランクされるのが学生集団ことばでしょう。およそ集団に溶け込むには、そこで使われる集団語をマスターしなければ円滑なコミュニケーションが図りにくくなります。学生達は積極的に集団語を身につけ、ひとりマスターすると更に次の新造語をクリエイティブに生産して行きます。これが学生の集団ことばが常に新らしくナウな感覚で存在する背景でしょう。それだけに入れ替りも激しく、これを取材した頃の学生ことばの中には、すでに消え去り現在は使われなくなってしまう言葉があることをお断わりしておきます。

とにかく学生集団ことばの何たるかを知る必要から昨年、長野市の長野県短期大学を訪問し女子学生にインタビューしてみました。以下は、その採録です。

「やっぱり東京の方から来たと思うんだけど、よくハナシがピーマンとか、果物とか野菜の名前を使ってするんです」「話しがピーマンってどういう意味?」「話しが通じないっていうか、わからない、中味がないカラッポだからピーマンっていうの。それから話しがトマトって言うのはネ、ピーマンの逆で中味がある、話しが良くわかるという時に使ってます」「ほかにはないの」「ある。バナナ」「それはどういう意味?」「話しがそれについてちゃうような人のことを言うの。それから「目立ちの根性」「何だって」「大勢の中で目立ちたい人はネ、ポコッて目立つこと言ったり、やったりするから、そういうのを目立ちの根性」

よくわからない話しや、中味のない人間を指してピーマンと呼び、その反対をトマト（例えば「あの人とってもトマトネ」などと使う）話しがすぐ脇道へそれてしまう人間をバナナと呼ぶなど人間の評価に結びつけるセンスなどはなかなかのものですし、女性らしい物の見方がよく表現されていて面白いと思います。

ところが、ある週刊誌が紹介した東京の女子大学生の会話は、ピーマン、トマト、バナナなどという可愛らしいものではなく、相手を攻撃、誹謗する新造語の多いのに、いささか驚ろかされました。そこで、それらの学生ことばをつなぎ合わせ短かいストーリーを持たせて、女性アナウンサー二人に再現してもらいました。

B子「ねえねえ、A子ったらネ、ファンデーション、わ作っちゃってさ、ハンチ、チのくせして、タンクトップ着てさ、胸元だぶつかせて歩いてたわヨ」

C子「ふーん、誰と?」

B子「それがねM大の学生と」C子「ヒエーッ。どんな男?」

B子「ウン、なかなかジュリって、たけどネ、いまいち、首から上がし、つこかつたよ」

C子「そうだろうね、M大はパープリンが多いからね」B子「わたし、ちょっとトイレってくる」C子「じゃワタシも一緒にトイレ、ちやう」

この会話を読んで、四十歳以上の男性で正確に理解できる人が果して何人いるでしょうか!! 特に傍点をふった部分は解説を加えないと何のことやら一向にわからないという人が多いと思います。

まず「ファンデーション」は「厚化粧」「ノンチッチ」は乳ちちがノンだから「胸がない」「ジュリって」は沢田研二（ジュリ）のようにカッコいいこと。「いまいち首から上がしつこかつた」の「いまいち」は、いまひとつ、「首から上がしつこかつた」は、顔が良くない、つまりぶおとこだった。「パープリンが多い」は頭の悪いが多い。「トイレってくる」「トイレっちゃう」は、トイレの名詞に「へ行く」という活用語尾をつけて動詞にしましたもの。

ということになります。これを聞いて気がつくのは、すべて相手を攻撃、誹謗する「ことば」ばかりだということです。更にもうひとつの特徴は、自分が大スランプにおちいつているような時の表現にも優れた能力を発揮していることです。例をあげると、極度に落ち込んで、なかなか這い上がれないような状態を「どつぽ」と表現します。「壺」に「ど」の接頭語をつけて「どつぽ」「つぽ」に落ち込んでスランプから脱却できない状態を指します。又「馬鹿」の活用形で、「ばかる」という使い方もします。「ああ、わたしはバカってしまった」など四段活用形で使い分けたりします。

このように「相手への攻撃、誹謗」と「自己のスランプ」の表現を巧みに作り出すのはもっぱら女子学生で、男子学生の新造語創造力はかなり低いということです。

その理由や背景はよくわかりませんが、勝手な推測を試みると女性の自己中心的な生き方が背景のひとつにあるようにも思えます。

結婚披露宴などでもよく歌われる、さがらなおみの「世界は二人のために」という歌がありますが、幸せ一杯の新婦にとっては、まさに今「世界は二人のために」あると実感するのでしょうか。しかし新郎にとっては結婚後の仕事のきびしさを、いやがおうでも認識しなければならぬ日でもあります。上司、先輩、同僚を攻撃、誹謗するだけでは生きて行けない事を認識する日でもありましょう。

そして「世界は二人のために」あるのではなくて「きょうから二人は世界のために何をすべきか」を考える出発点の日であるかも知

れません。そんなことが攻撃型の新造語を製造する能力では女性の方が優秀なのだという点に、あるいは関連があるのかも知れないと考えます。

こうして一連の学生集団ことばに接してみて、まず思うことは、「なかなかセンスがある」という評価と「このまま社会人になって大丈夫なのかなあ」という不安が交錯します。

女子学生達の新造語製造能力とセンスには敬服する一方、こういう学生達が、このまま社会人になったとき、本人はもちろん、企業の側も「ことばの矯正、やり直し訓練」にかなりの手間ひまをかけなければならぬナアと考えざるを得ません。限られた集団内でのみ通用する「ことば」が自己のボキャブラリーの大半という生活をしていると、社会人となったときに仕事や人間関係に少なからぬ支障をきたすという実例を身近に経験しているだけに無関心ではいられません。

ユニークな新造語のセンスは大いに磨き、楽しみながら、「第三者に対する、やや改まった会話」も使いわけることができる、そうした豊富なボキャブラリーを身につけることが社会人としても、個人としても豊かな精神生活を送るためには不可欠なことなのだという私見を申し述べて、「職業とことば」レポートを閉じたいと思います。

(信越放送報道制作局企画委員)